

ざいちのち

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

実践型地域研究ニュースレター No. 24 2010年10月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市 保津峡

亀岡フィールドステーション

愛宕千日詣りでにぎわう清滝にみる再生への潜在力

亀岡 FS 研究員 豊田知八

「お伊勢に七度、熊野に三度、愛宕さんには月参り」と江戸時代から「火ふせの神さま^[1]」として篤い信仰を集める京都・愛宕神社で、毎年7月31日から8月1日に行なわれる「愛宕千日詣り」に参拝してきた。この日、標高924mの山頂に鎮座する愛宕神社へ、日を継いで参拝すれば「千日(3年分)のご利益がある」と伝承され、山の参道と入口となる麓の集落・清滝には、全国から老若男女^[2]を問わず大勢の参拝者が訪れ、夜通しにぎわう。

31日正午頃から清滝には参拝者の姿が徐々に増え始め、夕方6時頃には、幅2mほどの狭い清滝の街道は人の行列で埋め尽くされた。参拝者の殆どは路線バスで来訪する。約50台が収納可能な唯一の有料駐車場も夕方には満車状態へ。

当日は、千日詣りを盛り上げようと京都愛宕研究会^[3]が、茶店「なかや」店頭で、独自で製作した登山用の杖や根付、Tシャツなどの「愛宕詣グッズ」を販売したほか、清滝川に掛かる渡猿橋両端に灯籠も設置し、日常と異なる情緒を演出した。

清滝の二の鳥居から約700m上に位置する山頂までの約4キロの参道は、つづれ折れの急な山坂道が続き、体力的にかなり厳しい登山。参道には神社が設置した電灯が照らされ、参拝者達はすれ違うごとに「おのぼりやす」「おくだりやす」という温かみある京都ことばで声を掛け合い、お互いの労をねぎらう。これも江戸時代から続く愛宕参りの伝統だ。

神社境内は献灯の提灯により、900mを越える夜の山頂とは思えない明るさ。社務所では「火の要慎」のお札やお守り、櫛を買い求める参拝者で初詣のよ

うな賑やかさだ。また、日付が変わる深夜の時刻から登る参拝者も多く、明朝まで清滝には参拝者の列が途絶えることがなかった^[4]。

僅か2日間ではあるが、千日詣りに集う大勢の人々の姿は、愛宕信仰の潜在的な根強さを表していると感じる。俗から聖への境界であった水垢離場・清滝川^[5]沿いの清滝集落の形成要因と愛宕信仰との関連性は極めて強い。信仰が清滝に集落を発生させ「参詣の道」により他地域との間に、人や物資のつながりを生み出してきた。その道はただの街道ではなく‘祈り’という人々の「心を運ぶ道」でもあった。その信仰の道との接点が途絶え、ただの山峡の里として孤立したことが現在の集落衰退を招いているとは考えられないか。里と都市を結ぶ‘祈りの道’を新たにつなぎなおす試みが、清滝再生のカギになると思えてならない。



写真1:夜通し参拝者の列が絶えない。

脚注

- [1]祭神は雷神・迦遇槌命。全国900社の愛宕神社の総本宮。
- [2]愛宕山は修験道の修業場だが江戸時代より男女混雑の登山を許可している。当日の参拝者は約1万人といわれる。
- [3]市民による愛宕神社御鎮座千三百年記念委員会が主体となり平成16年に発足。連続講座やシンポジウム、フィールドワークを実施している。千日詣りでの活動は4年前から行なっている。
- [4]三歳未満で、千日詣りに参れば一生、火事など火の災難に遭わないとの伝承がある。
- [5]保津川の支流。京都市北区小野郷が水源地で、紅葉の名所高雄から清滝を流れ保津峡で保津川に注ぐ全長約20km。

守山フィールドステーション

「守山宿だるまそばの会」

守山宿だるまそばの会会長 松永之和

「だるまそば」って何？

そばと言えば、中山間地のもと考えられがちですが、平地の守山でも、明治 40 年ごろは、そばの栽培の記録があり、河西では 8～11 石 (1,000～1,500 kg) の収穫があったようです。

郷土誌によると食用の他は売却とあり、中山道には、うどんやそばやが 3 軒あったと言われ、そばの食文化があったようです。

「浮世絵にそばが？」

中山道を描いた浮世絵には、歌川広重と歌川国芳があり、広重が風景主体で、国芳は各宿をパロディ化した絵で描き、守山宿は達磨大師がそばをたべているものです (図 1)。

守にもりそば、山にやまかけそばの語呂合わせでしようか。達磨大師は中山道に隣接して禅寺があることからの発想でしょうか。絵のぞる 36 枚は、四苦 (四九=36 枚) 八苦もせぜたいらげると言うユーモアたっぷりです。

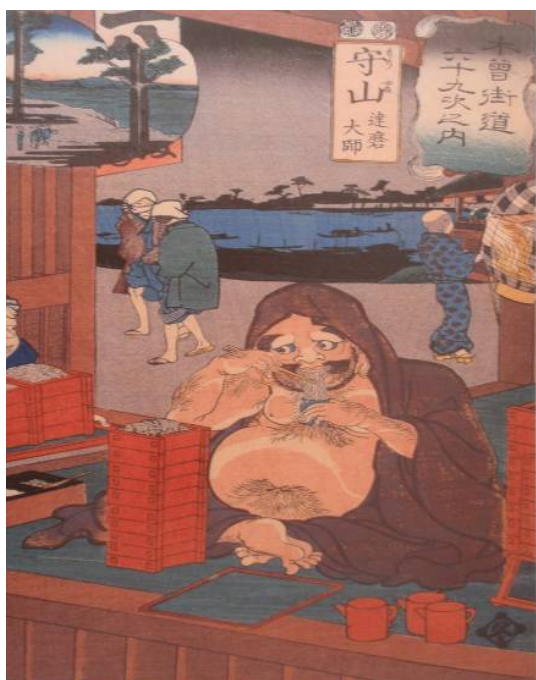


図1: 歌川国芳「木曾街道六十九次」守山 達磨大師

商店街の取り組み

この絵を活用し、地元商店街の婦人部が「だるまそば」として取り組んでいたものを、絵にある「二八」の手打ちそばとして、街づくりをしようとしたのが、本会です。現在は、「だるまそば」をイベントに出店したり、そば打ちの体験などを行っています。

大学との協同

H20 年 10 月に本会設立、H21 には、滋賀県立大学の「近江楽座」のプロジェクトとして中心市街地での畑を使ってそばの栽培の取り組み、H22 には京都大学の守山フィールドステーションでの取り組みとして学生さんたちとともに、市街地では見ることのないそばの栽培を通じて花や実を身近に見てもらい、街づくりにつなごうと活動しています。

街づくりにストーリーを

守山に縁のある「だるま」そばにこだわり、地域の子供会、自治会、市民へと広げ、まちづくりを広げたいと思います。

また、「だるまそばぼうろ」として守山市観光物産協会で商品開発もされています (写真 1)。

国芳の達磨大師のユーモアにちなんで楽しい取り組みになるよう、大学の落語研究会と「だるま寄席」などにも取り組みたいと考えています。



写真1: だるまそばぼうろ 守山市観光物産協会

朽木フィールドステーション

むらの方からの提案 ー余呉・摺墨での試みー 朽木 FS 研究員 増田和也

「そろそろ摺墨（するすみ）の様子もわかってきたやろ。何か次のことをやりたいね」。今年の4月中旬、摺墨の方に電話を入れると、このような言葉が返ってきた。

余呉での一連の取り組みで指導と協力を仰いでいるのが永井邦太郎さんである。その永井さんが暮らす集落が摺墨だ。昨年度の作業を始めるにあたって関係者一同が顔を合わせる機会があり、摺墨からは永井さんに加え3名の方が出席された。そのうちの一人に田植えへと誘われ、FSメンバー一同で出かけたことから摺墨とのつきあいが始まった。今年もふたたび田植えにお邪魔しようと連絡を入れると、先のような言葉をいただいたのであった。

摺墨ではどのようなことができるだろう。田植え前夜の宴では、いくつかのアイデアが挙がった。源流部の清涼な水を活かしたワサビ栽培、休耕田でのソバ栽培、などなど。その場では具体的なことは決まらなかったが、今後も話し合いながら進めていこうということになった。

6月下旬、摺墨を中心となって世話する3人組にお願いし、摺墨で誇りに思うこと、逆に深刻になっていること、について書き出していただいた。そして、挙げられたトピックを内容ごとにグループ化して整理した。現在深刻なことがらの一つは、後継者・人材の不足である。そのために集落を維持するための作業や役柄も限られたメンバーでなんとか廻している状況にあり、「自分のことで手一杯で、むらのことを考える余裕がない」という。また、集落にこれといった収入源がないことも指摘された。そこで、「外」の人とともに何か新しいことができないうこと、私たちに声がかかったのである。この時もそのまま宴に移行してしまったので、またしても明確な結論が出たわけではなかった。しかし、田植えの時に挙げたアイデアのひとつ、ソバづくりをとにかくやってみよう、ということで話しはまとまっていた。

中河内や赤子山での焼畑のための作業に通う一方でソバ栽培の方も準備を進めたが、いつソバの種を蒔くのかということが問題となった。3人ともソバ栽培の経験がないというので、むらの長老2人に尋ねてみた。すると、ある方は「盆前後」という一方で、別の方は「盆過ぎ」とおっしゃり、「ソバは霜に二度当ててから収穫」といわれる方もいた。結局、メンバーの都合で8月最初の日曜日に種を蒔くことになった。

2カ所の耕作地のうち、1カ所については発芽率が思わしくなかった。播種の時期がよくなかったのかもしれないし、日当りや土中の水分量が問題なのかもしれない。ある人は、播種の後に鳩が集まっていたといい、鳩に食べられてしまったのかもしれない。こうして疎らに伸びたソバは、やがて雑草の中に紛れていった。もう1カ所も発芽率は今ひとつだったが、花がちらほらと咲き、わずかながらも収穫が期待される頃、畑内をイノシシが駆け回り、ソバは無惨にも倒されてしまった。こうして今年のソバ栽培は収穫に至らずに終わった。「これをきっかけにして新しいことが始まれば」。残念な結果となったが、3人組はあまり悲観されていない様子だ。

今回、むらの方から声がかかったというのは、たいへんに有り難いことだ。一方、ソバを育てることだけでもまだまだ知らないことだらけだ。摺墨のことについて学びながら、むらの方と一緒に取り組みをつくりだしていけたら。何やら宿題をいただいたような気持ちで、これからも摺墨に通わせていただきたい。



写真1: 集落内の畑に蒔いたソバ。雑草に紛れてしまった。

■第28回 定例研究会

1. 日時：平成22年10月29日（金）16:00~19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：Tomo RIBA（ラジブ・ガンディー大学地理学科）

水利用のローカル・ノレッジーかばたとパンチュラン、どこが違うのか？ー

総合地球環境学研究所 アミ・A・ムティア

太古の昔から、村民は、自然と共生することを可能にする自らの地域の知識を生み出した。水は生活に欠かすことができず、すべての民族は水の利用に関するローカル・ノレッジを持っている。湖の端に住んでいる人々はなおさらであろう。

琵琶湖の周辺、高島市針江区や野州市の篠原には、日常生活のために湧水を使用する文化がある。これはかばたと呼ばれる。川のそばに井戸を作ったので「川端」から「かばた」になった。このローカル・ノレッジは、琵琶湖近くの人の中に今日に至るまで伝えられ生活の中に息づいている。

針江区ではかばたを作る時に井戸を掘り、深さ15~20メートルの地点から湧水を得る。元の水源は、モト池と呼ばれる。新鮮な湧水を直接家の台所の中にパイプで引き入れる、ないし小さな池（シンク）を作って貯める。ふつうかばたには二つの水の池がある。それは、坪の池と畑の池である。坪の池では夏野菜であるキュウリ、トマト、ナスなどを洗う。畑の池では、ハウレンソウ、大根、ニンジンのような土がついた野菜を洗い、果物をかばたで冷やすこともある。かばたからの水は直接飲料用に用いる。

かばたは食べ物や食器あるいは鍋類を洗うために使用される。かばたの中に魚がいる（写真1）。魚は食べ物の残りを食べる。汚れた水を魚や微生物がきれいにしてくれる。



写真1: 魚がかばたの中におり、ごはん粒などの食べ物の残りを食べる。

篠原のかばたでは、幅1.5、高さ4~5メートルの水路に湧水を集め分岐水槽にながす（写真2、左）。そこから各家の庭にパイプでおくる。

篠原では、かばたからの排水は庭にある池に流し、最終的には川に流れてゆく。このシステムにより、川の水を維持することができる。

篠原のかばたのようなローカル・ノレッジは、インドネシアではパンチュランと呼ばれている。西スマトラのマニンジャウ湖の周辺に住んでいる人々

4. 発表内容

Shifting cultivation and tribal culture

-A case study of Tribal of Arunachal Pradesh, India-

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

はパンチュランを昔から今日まで利用している。そして、水が継続して湧いて来るように山や森を守る必要性も人々は認識している。

パンチュランには二種類ある。一つは山からの湧水を水槽に集めるパンチュランである（写真2、右）。そこから、パイプでそれぞれの家に流す。二つ目は高い池から低い池までに水を流すパンチュランである。その池水はいくつもの池から流れる水なので、ろ過した水のようにたいへんきれいである。この種類のパンチュランは西ジャワでもよく見られる。

パンチュランは、かばたのように日常生活に用い、沐浴に用いたり、イスラームの礼拝の前の清めに使う。そのため、パンチュランの水はきれいであるだけでなく、神聖な水であると皆が信じている。沐浴場で、お皿や料理道具を洗う。その排水は外（庭）の池に流す。外の池の中には魚がいる。かばたと違って、パンチュランの中には魚はいない。



写真2: 野州市、篠原区の湧水の水源地と分岐水槽の構造（左）。パンチュランの分岐水槽（右）。

二つ目のパンチュランは、公衆沐浴場に用いるケースが多い（写真3）。家の中にパンチュランがない人は、皿洗いや食品洗いやあるいは、沐浴のために公衆沐浴場に行く。公衆沐浴場から流れる排水は別の池に流れる。その池の中に魚がいる。その魚が食べ物の残りを食べる。これは、かばたのような水循環である。ただ、かばたからの排水が流れる庭の池には、観賞用の魚しかいない（篠原）。パンチュランでは、池の中に養殖魚を飼っているので、成長したら皆が食べる。このように環境循環が明確である。このローカル・ノレッジは、生態環境と調和した人間の知恵ということができる。そして、このローカル・ノレッジを通じて、人々は水を守り、山や森を守る意識を世代を超えて伝えてきたのである。



写真3: 公衆浴場にあるパンチュラン。